



東福寺神社の神紋

# 東福寺神社だより

第5号 令和3年11月10日発行  
発行 東福寺神社

〈問い合わせ先〉

- 上組区の総代    ■中組区の総代
- 東区の総代      ■上庭区の総代

## 氏神<sup>うじがみ</sup>さまです

## 東福寺神社は

私たち上組・中組・東・上庭の

あちこちに施されている



蚕に関する  
意匠が、

保食神<sup>うけもちのかみ</sup>

養蚕神<sup>ようさんじん</sup>

▶ 祠の側面（両サイド）に、馬の彫刻が刻まれている



養蚕社<sup>ようさんしゃ</sup>（蚕神<sup>かいこがみ</sup>）は、東福寺の  
養蚕業<sup>し</sup>を告らせるシンボル



東福寺は明治・大正の頃から  
養蚕業が盛んだった

# 江戸後期から明治・大正・昭和30年代まで 東福寺は、養蚕業が収入の中心



▲各集落に設けられた稚蚕飼蚕所

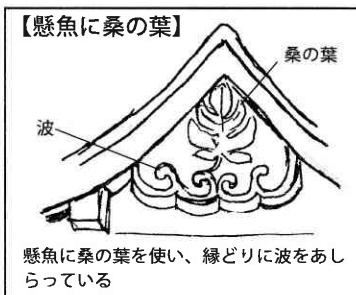
『東福寺村三百戸、農桑を業とす。女三百四十一人は養蚕を業とす。繭千四百四十貫、米千六十九石、大麦千百十二石：産す』  
(明治十五年の村勢報告『長野県町村誌』より)  
その後も米作・麦作、養蚕が農業経営の中心だったが、大正期は養蚕の好況に支えられ、東福寺村は畑の九〇%近

蚕かいこに関する意匠が刻まれ

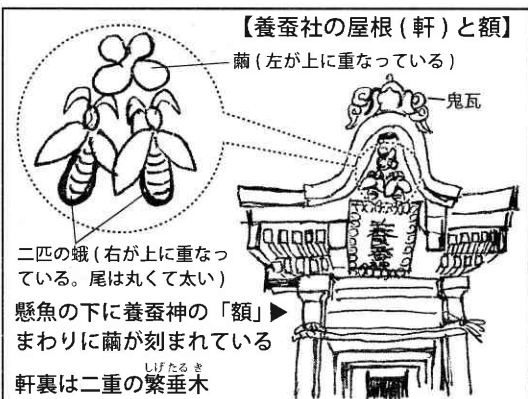
凝こった造りの「蚕神かいこがみ」

藩政時代から東福寺は、米作を基本として綿花・菜種・雑穀・養蚕が主でした。

くを桑園にして、「おかいこさん」の増産を図った。当時の桑園面積百七十九町歩は、近隣ではダントツだった。(大正十二年『長野県史』より)



【懸魚に桑の葉】  
懸魚に桑の葉を使い、縁どりに波をあしらっている  
▲養蚕社背面に明治三十一年十一月建立 長野市石堂町石工・中山友三郎と記されている



【養蚕社の屋根(軒)と額】  
繭(左が上に重なっている)  
二匹の蛾(右が上に重なっている。尾は丸くて太い)  
懸魚の下に養蚕神の「額」まわりに繭が刻まれている  
軒裏は二重の繁垂木

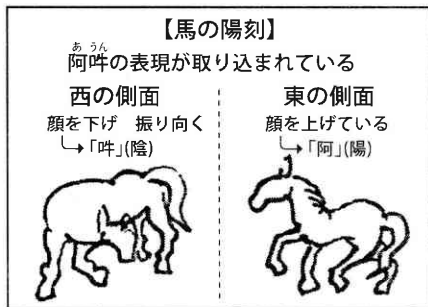
## 蚕神と馬の関係

「蚕」と「馬」はたいへん関係が深い。そもそも蚕の数を一頭、二頭と数えるほどである。

中国の古書『搜神紀』という本に蚕糸や絹に関する物語がいくつかある。中に「蚕」と「馬」の悲恋から「桑の木」が出現する話がある。

中国の「蚕神」の姿は、「馬明王」と呼ばれ、龍が手にするカゴに繭を持ち、馬に乗っているのである。

「蚕」と「馬」の関係は深く、東福寺神社の「蚕神(祠)にも馬が刻まれているので、興味を持って見てください。



【馬の陽刻】  
阿の表現が取り込まれている  
西の側面 顔を下げ 振り向く →「阿」(陰)  
東の側面 顔を上げている →「阿」(陽)

## 桑の木と桑畑

「桑」は中国語で「喪」と同じ発音で蚕のことを桑(喪)蚕と呼んでいる。

資料協力/元高校教諭で社寺建築史研究家の故・相原文哉さんが、東福寺神社に寄せていただいた調査資料を一部借用。

蚕のエサとなる桑は、たくさん植えられたところは「桑畑・桑原」と呼ばれ、農地として最も大切なところで、神聖な地とされた。

雷を避けるマジナイ・呪文に「桑原、クワバラ」とよく口にするが、語源はここから出ている。

東福寺一带は明治から大正時代、畑地の九〇%に桑が植えられ、まるであたり一面、桑畑でおおいつくされた集落だった。

## 中組・上組の氏子によって 毎年懇ろな供養神事

### 小祭り・末社祭

春、秋の大祭に対し、小祭りと呼んで末社祭を催しています。

は例年、秋の大祭の数日後に、上組と中組両



五明宮司による懇ろな供養神事

東福寺地区の戸数と人口（『更級統計書』より）

年次	東福寺村		中沢村		小森村	
	戸数(戸)	人口(人)	戸数(戸)	人口(人)	戸数(戸)	人口(人)
文化6年(1809)	—	901	—	162	—	438
安政3年(1856)	210	—	35	—	114	—
慶応4年(1868)	213	1,003	35	165	110	547
明治15年(1882)	302	1,374	明治8年 東福寺村と 合併		明治22年 東福寺村と 合併	
22年	426	2,194				
43年	399	2,517				
大正5年(1915)	395	2,479				
14年	422	2,149				
昭和5年(1930)	425	2,213				

区のみで、昔からとり行われてました。拜殿東側の養蚕神社の前で五明宮司の斎行で、末社祭の当番は、上組と中組が一年交代で務めています。

**末社祭の三柱神**

東福寺の集落を導き、加護してくれた神として、三つを崇めています。  
**「保食神と呼ぶ「養蚕の神」**

江戸の昔から、東福寺の住人の衣食住を司ってくれた「お蚕さま」に感謝します。

**迦具土神**

秋葉社と呼び、火伏せ(火防)の神様です。生活の火の用心としておすがり願うのです。

**猿田彦神**

**厄除けの神**

「みちひらきの神様」です。自身の穢れの大祓いを、これらの神に託し、その他の石祠に感謝をささげ、四手のお切り換えをかかさず行っています。

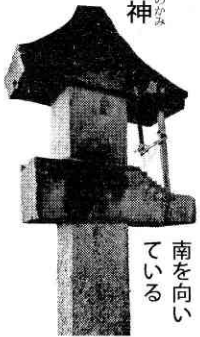


東福寺は、蚕の生産が盛んな頃は各集落に、稚蚕飼育所が設置されて稚蚕の生育を計ったものだ。

毎年、春祭りが終わる四月下旬、各戸では自宅の畳を挙げて、春蚕の飼育をはじめ、七月繭として出荷が終われば、すぐ秋蚕の飼育にかかり秋祭り前に繭出荷した。

挙げていた畳を戻し、親戚縁者を招く秋祭りの準備を、あわただしくやったもんだ。当時の秋祭り前夜祭

**迦具土神**



南を向いている



西を向いている

(神楽奉納)には、屋台も3〜5店出店し、賑わいが夜遅くまであったなあ、人もたくさん出た！末社祭の前は各戸が灯籠をかがけて、「蚕神」

**境内に並ぶ石造神  
ご利益多し12基の石祠**



◀庚申塔(万延元年)



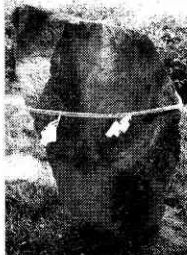
◀庚申塔(万延元年)



神社境内の東側に居並ぶ石祠



◀庚申塔



◀庚申塔



◀庚申塔(安政七年)



◀二十三夜塔

青面金剛石仏  
〔宝暦年間の石仏  
この石造物群の  
中で一番古い〕



この部分の元図  
足元に猿、頭の脇に鶏、それぞれが一对描かれている



◀庚申塔



▲判断できない石仏

を祝い感謝した。今でこそ、末社祭の扱いが軽くなっているが、養蚕農家にとつてたいへん重要な祭事だったんだよねえ。

東福寺神社に漂う風格

神社の幟旗

神社に

とつて無

くてはなら

ないものが

幟旗だ。各

地、村々の

祭り期日を

知らせる発

信塔でもある。

東福寺神社で今使われている幟旗

は、明治初期の神社起源からして五

代目の幟になるかもしれない。揮毫

していただいたのは、稲荷山出身の

国会議員で、長野、更級、北信を地

盤にした倉石忠雄さんだ。労働・農

林・法務大臣を歴任した。二度目の

労働大臣就任（昭和三十三年六月）

を記念して揮毫していただいた。



サッカーユスタジアムの南側直前に立つ、東福寺神社と幟。最強軍神が見守っている

萬物生光華

昭和十七年五月廿日

→ 読み下し文 ばんぶつこうかしようず  
大意 生きとし生けるすべてのものが美しく輝いている

和氣洽昌辰

倉石忠雄 揮書

→ 読み下し文 わきしやうしんあまねし  
大意 和やかな気が明るい光のもとあまねく降り注いでいる

(文責・大久保総代)

大鳥居の寄進

神社の参道に立つ大鳥居は

中組の氏子・渡辺善治郎さん（現戸

主・渡辺文治さんの祖父）による寄

進で建立されたもの。現存するお孫

さんたちが「おばあちゃんがよく言

つてた お宮の鳥居はじいちゃんが

松代豊栄の山を売って建てたんだ」

大鳥居はいつの建立か定かでない。



▲35年前に銅板葺きされ堅牢な鳥居に

和田家寄進の常夜灯

神社参道脇に立つ、モダンな常夜

灯は、上庭の氏子・和田九郎衛門さ

ん（現戸主・和田文利さんの五代前

戸主）による寄進で、天保十年、今

から百八十年前の建立である。

五十五年前の松代群発地震で、灯

籠部が潰れて破損したが、十年前に

和田家に

よつて

修復

復興



「鎮守の杜」で育つ子

神聖な「鎮守の杜」は、境内は静

かで木の葉が風に揺られる音、小鳥

や昆虫の鳴き声が四季折々楽しめます。

子どもにとつて、森は不思議な

国の入り口で、太陽や風さえも、森

の中にいるといつとも違って感じら

れます。森を探検すると、今まで出

会ったこともないようなワクワクす

る遊びがたくさん待っています。

この良さを知ってもらいたく、自

然物を探す「フィールドビンゴ」と

いう遊びを、親子で過ごしました。

「ハロウィン」も楽しみました。

昔から人は自然の中に神さまの力

を感じながら暮らし、子どもは神さ

まの森で思つきり遊ぶことで、自然

を大切にす

る大切にする

心、自然と

もに生きる心

を学んできま

ました。子ども

の遊び場が減

少する中「鎮

守の杜」はほ

んとうに貴重



▲木の実をつけたマントがかわいい。



▲「かたつむり発見！」フィールドビンゴで

（東部保育園記）

おいしい牛乳を皆さまにお届けします

長野牛乳株式会社

長野市稲里町田牧 1548 TEL:026-284-3114

